

学童の生活の中での『飽きた』をなくそう!!

山形県立山形東高等学校
沖 遥香 / 高橋 綾乃

CONTENT 発表内容

皆さんは、学童にどんな印象がありますか。6年間通ってきた私にとっては、楽しい場所という印象が大きいです。山形県は共働き世帯数が多く、また学童の施設数も増加しています。一方で、学童での生活は単調になりやすいほか、コロナ禍や気温上昇で外遊びができないなどの制限があるため、児童が飽きやすい状況にあります。

そこで学童をより楽しめるようにするため、学童と高校生をつなげる「ガクコウリンク」を提案します。これは高校生が放課後や長期休みに学童へ行き、児童と交流をするプログラムです。この取組みでは3つのことを通して交流を行います。

■学童の日常に高校生が混ざり、児童と遊んだり話したりする

■高校生の好きなことを児童にレクチャーして一緒に楽しむ（お絵描き・部活動体験・中学高校の生活紹介など）

■山形の魅力を楽しみながら学べる交流

（高校生が山形に関するおもちゃを手作りして一緒に児童と遊ぶ）

私たちは実際にこの取組みを3週間行いました。交流では部活動体験として、ソフトテニスで遊んでもらいました。



また、山形の観光名所や祭りを紹介する「山形かるた」を作り、一緒に遊びました。

実施後のアンケートの結果を見ると、児童がより楽しく遊べたほか、高校生からも「自己肯定感が向上した」や「充実感を得た」との回答がありました。

この取組みは学童を楽しくし、さらには多世代交流だからこそ得られる学びを生み出します。「ガクコウリンク」で児童と高校生の双方に経験と笑顔を作り、山形の未来に貢献します。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 **片岡 英彦**

僕が学童について企画を考える場合は、待機児童の多さや人手不足などを考えますが、「飽きる」という質のところをスタート地点にしているのに驚きました。学童は全国に3万箇所あって、150万人が登録しているそうです。今後はこのアイデアを全国に波及させるにはどうしたら良いかも併せて考えてもらえるといいと思いました。



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO **矢野 和男**

Q. 高校生が継続して実施できるような楽しさがありますか？

A. 高校生に感想を聞いたとき、全員が真っ先に「楽しかった」と言ってくれました。子どもに興味のある人を中心にメンバーを集めたことが一因にあると思いますが、今の時点でも、高校生に楽しんでもらえていると思います。

山形めんこいぱっち

山形県立新庄神室産業高等学校

佐藤 春香 / 小林 由依



CONTENT 発表内容

今の子どもはゲームやスマホに夢中になり、外で遊ぶ機会が減って運動不足になりがちです。また、高齢者も年齢を重ねるとに家に引きこもることが多くなり運動不足になりがちです。

さらに、山形には美味しいものや文化、歴史的な名所がたくさんあるので、山形の魅力をより多くの方々に発信したいと思っています。

そこで、「山形めんこいぱっち」を提案します。山形弁ではかわいいを「めんこい」と言い、めんこを「ぱっち」と言います。私たちは小学生と高齢者をターゲットとした遊び・交流用の「角めんこ」と、コースターとしても利用できる外国人や観光客用の「丸めんこ」を考えました。

実際に遊んでみると腕だけでなく全身を使うので、いい運動になりました。

めんこの経験のある先生から遊び方を教えてもらう中で、いろいろな会話ができて交流ができました。また高齢者の方にめんこの遊び方や伝統文化を教えてもらうことで、遊びながら世代間交流ができました。

丸めんこには山形の食べ物や文化、歴史的な名所などが描か



れています。イラストは私たちがデザインしました。裏にはイラストの説明が書いてあり、英語でも表記しています。また、ラミネート加工をしているので、コースターとしても使うことができます。外国人や観光客のお土産として、お土産屋や道の駅で販売することで、山形の伝統や文化などの魅力を知ってもらいきっかけになります。

この「山形めんこいぱっち」を使うことで、小学生も高齢者も運動不足の解消になり、小学生は発想力の成長にもつながります。また、高齢者は若い世代との交流を図れます。さらに、外国人や観光客には山形のお土産として買ってもらうことで山形の魅力を知ってもらいたいと思います。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

昔の遊びの復活や子どもと高齢者の交流、伝統文化のPRなど、このめんこ1つに様々な価値を見出したのが本当に素晴らしいと感じました。コースターとしてお土産にまでなるということで私たちが発見になりました。私としてはとても発展的な取組みだと思って聞かせていただきました。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

私も子どものころ、めんこに夢中になったので非常に感心しながら話を聞きました。この取組みは遊びを通して、世代間の交流、障がい者との交流、観光地域の活性化、そして健康への配慮という広範囲のものがギュッと詰まったアイデアだと思います。併せて、伝統文化の継承という視点もあるので、本当に素晴らしいと思います。



かかし サイボーグ狩狩神

～農作物と人を守る未来の守護者～

惺山高等学校

阿部 翔 / 川崎 烈 / 長谷川 彩人

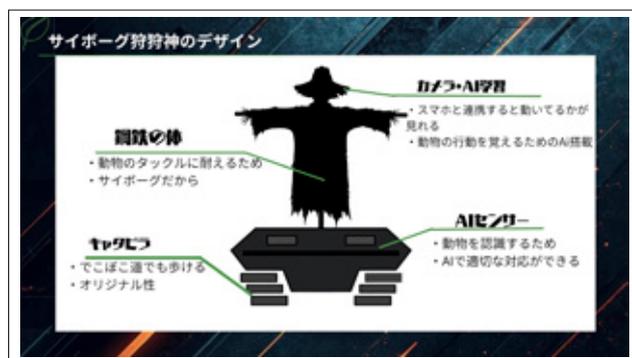
CONTENT 発表内容

2025年、山形県ではクマの出没が異常に増え、過去最多だった2020年の約3倍にも上っています。そして被害は深刻化しており、作ってきた農作物が食害によってお客様に届けられないのはとても残念という農家の声があります。

従来の対策としては電気柵・爆音機などがあります。しかし電気柵はクマが乗り越える可能性があり、爆音機は慣れてしまうと威嚇効果が薄れてしまうなどの課題があります。

そこで私たちが紹介するのは、農作物と人を守る未来の「サイボーグ狩狩神」です。この「サイボーグ狩狩神」は、農地の自律巡回しながらAIでクマを事前検知し、非殺傷でクマを遠ざける防衛システムです。固定型、人手依存の対策では守り切れない現状に安全・省力・広域防護という新しい価値を提供します。

このかかしにはAIを搭載し、動物の行動パターンを学習することで効果的な威嚇・追い払いを実現します。またキャタピラ駆動により、整備されていない場所でも移動が可能です。そして動き回ることを持続的な威嚇効果を発揮します。このような性能により、従来よりも防御の幅が増え、1つの



威嚇方法による慣れのリスクを軽減できます。また動物の侵入しやすい時間帯やルートを予測することで、電力や人件費などの運用コストを大幅に削減できます。さらに、被害減少により農家の負担削減と経営の安定化などに貢献します。

この「サイボーグ狩狩神」は、高性能センサーによる即時検知・種別識別と、データに基づく行動パターン学習を融合させます。これにより従来の防御策が抱える「慣れ」の問題を克服し、地域特性に最適化された予測的な防御を自動で展開します。労力を最小限に抑え、被害ゼロと安定した収穫を持続的に実現します。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 **片岡 英彦**

Q. 高校生らしくて良いですね。なぜ害獣が問題か、その背景の議論はしましたか？

A. 最近クマによる農作物被害が非常に増えていると感じています。3人で話し合っただけでこのままだと一方的に増えてしまうと思ったので、かかしをサイボーグ化するアイデアを思いつきました。



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO **矢野 和男**

Q. まさに日本中が騒ぎになっているクマの問題に取り組んでいるのはとても良いと思いました。企画に至ったプロセスがあれば聞かせてください。

A. クマ被害の増加を知ったとき、上市市で有名なかかしでクマから守れたら良いという思いが浮かび、サイボーグ化するアイデアに至りました。



ヤマガタスタジオ ～知らない山形が、たくさんある～

山形県立東桜学館高等学校
森谷 条治

CONTENT 発表内容

私は探究学習についてのアイデアを提案します。探究学習をする中で「専門性をもっと上げたい」「山形に関する内容を探究したい」と考えたとき、特に専門性の高いものはインターネットに情報がなくて調べにくいんです。私自身も誰に聞いたらいいんだろう、もしくはどうやって外部機関とつながったらいいんだろうと悩んでいました。

それを解決するのが、今回考えた「ヤマガタスタジオ」です。これは山形県の大人をブログで紹介する企画です。そのブログを高校生に読んでもらって、自分の探究に応用できると思ったらつながれる仕組みを創るのがこのスタジオです。掲載する大人として想定しているのは、県内企業もしくは個人で面白い活動をしている方です。ブログの構成としては、事前に高校生からその人や企業への質問をヒアリングして、それに対する答えをまとめています。例えば会社の概要や仕事の1日の流れ、その人の必需品など、高校生がより興味を持ちやすいような工夫をしています。

読んでくれた高校生からは「興味がない職種だったけれど、今回のブログを通して興味を持って読むことができた」な



どの声がありました。一方で、「短すぎた」「連絡先など企業とつながる情報を明確にしてほしい」という声もありました。

逆に企業側からは「高校生が何を知りたいかを企業としても知りたいので、生徒視点の質問なのがすごくありがたい」とのお話をいただきました。

高校生が県内の大人を知ることは山形の魅力を再発見することとなり、それは郷土愛にもつながると思います。そして県内就職・県内進学率の増加や、県外に出たとしてもUターンしてくる人材が増える可能性もあります。この活動は高校生・企業はもちろん、山形県全体に影響を与え、ウェルビーイングの実現につながると考えています。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

まずプレゼンがとても上手ですね。そしてこのアイデアは絶対に必要だと思います。探究学習では、人と関わって地域社会を知ることによって自分が成長していく要素がなければ、せっかくの活動がもったいないと思います。山形県の若者流出なども含め、いろいろな課題の解決が図れる点で非常に良い取り組みだと感じました。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

Q. プレゼンが上手で熱意が伝わってきました。ブログを高校生に読んでもらうための工夫は何かありますか？
A. ブログの内容を集約してインスタグラムに投稿しています。さらに深く知りたい人がいたら、インスタグラムからブログにアクセスできるような仕組みを作っています。



黄色い紅花運動

～車社会の山形を安全に～

山形県立山形東高等学校
鈴木 桜彩 / 舩山 詩桜 / 渡辺 夢生

CONTENT 発表内容

皆さんは黄色信号の意味を正しく言えますか。急いで進むではありません。街を歩いていると信号で危ない思いをすることが少なからずあります。皆さんも運転中や歩行中に、交差点でヒヤッとしたことがあるのではないのでしょうか。

そこで私たちは安全な車社会を創りたいと思い、山形の交通についてのアイデアを考えました。それは紅花パワーで山形県民の交通安全意識を高めることです。黄色信号の正しい意味は、「安全を損なわない限り止まれ」であり、停止線を越えた場合、または接近して安全を損ねる場合に限り、進むことができます。この「黄色い紅花運動」の目的は黄色信号の意味を正しく理解し、意識してもらうことです。具体的には紅花を信号機の配置にしたグッズを作って注意を呼びかけようと考えました。例えば、花笠や軽部草履などの伝統工芸品、缶マグネットやステッカーなどの車につけるものです。山形の伝統とのコラボにより地域活性化も図ります。

紅花をタイトルに用いたのは、その色味が信号機と共通し山形のPRにもなるためです。皆さんは紅花と聞くと何色のイメージを持ちますか。おそらく赤やオレンジを思い浮かべ

グッズの具体例

芸工大生の方にデザインを依頼

伝統工芸品
車につけるもの

- ▷山形の伝統とのコラボ
- ▷若者で地域活性化



た方が多いと思います。ですが、私たちはあえて黄色い紅花を用いました。紅花と同様に信号でも赤信号だけでなく、黄色信号にも目を向けてほしいという思いを込めました。

現状として、黄色信号の意味を正しく理解し、行動していない人が多くいます。山形県民で協力して安全な車社会を創りましょう。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 **片岡 英彦**

普通、交通安全の活動は「ルールを守らないと危険です」で終わってしまいます。ですが、この企画は黄色信号が「止まるかどうかで迷う」という1点に集中して、注意を呼び掛けていることが素晴らしいと思いました。



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO **矢野 和男**

アイデアがとてもユニークだと思いました。交通を取り上げるときに黄色信号の一点突破で注目したのがポイントで、それに紅花という全く違うものを結び付けた発想がとても大事だと思います。



鶴岡シルクの復活

～廃棄されるセリシンをジェルネイルに～

山形県立致道館高等学校

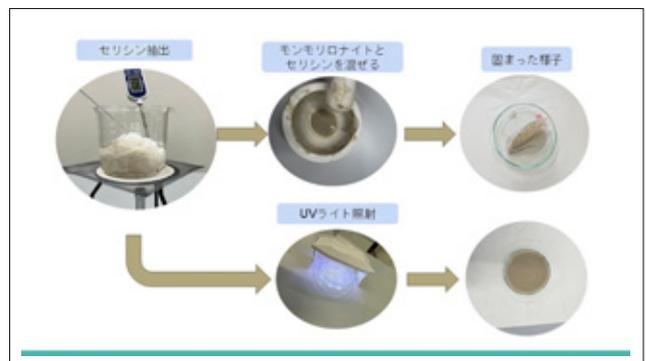
本間 凜花 / 伊藤 寛都

CONTENT 発表内容

皆さんは鶴岡とシルクが深い関係にあったことを知っていますか。戊辰戦争で新政府軍に敗れた庄内藩は刀を鋏に変え、荒地を開墾し、鶴岡のシルク産業の発展に大きく貢献しました。後にそれは「侍シルク」と呼ばれるようになります。しかし現在は化学繊維の発展に伴い、シルク産業は衰退してきています。

そこで私たちが考えたのは、鶴岡シルクを使いジェルネイルを作ること、産業発展に貢献したいというアイデアです。ジェルネイルはUVやLEDライトを照射することで硬化します。3～4週間ほど持続しますが、その強度を実現するために人によってはアレルギー反応を引き起こす物質が入っているため、みんなが安心安全に使うことが難しくなっています。

そこで肌に優しいシルクを使うことで、爪にも優しいジェルネイルができます。また今回はシルクの中でも捨てられてしまうセリシンという物質を使うことで、エコにもつながるのではないかと考えました。シルクを構成する物質の1つであるセリシンは、手触りがごわごわしてしまうため、シルクの生産過程でアルカリで除去されています。一方でセリシンは水に溶けや



すく、高い保水性・吸水性があり、さらに人の肌への親和性を持つという特徴があります。

商品名は「シルクネイル」にしようと考えています。ボトルのデザインは山形県や鶴岡市の有名デザイナーに依頼します。さらに県内外のたくさんの方に知ってもらうため、鶴岡市のふるさと納税の返礼品として置いていただけないかと考えています。また、私たちは「シルクネイル」の最大の特徴であるアレルギー反応を引き起こす成分がないことから、医療や介護関係者の方、アレルギーで悩む方にも「シルクネイル」を楽しんでいただくために、実店舗での販売も目指しています。

「シルクネイル」で鶴岡・山形を盛り上げたいです。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

不要とされるセリシンをどう活かすかを考え、いろいろな実験を繰り返された点が素晴らしいと思います。誰でもおしゃれを楽しめることはとても大切で、アレルギーがあって諦めている方にこのような商品が届けば良いと思いました。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

聞き慣れない言葉がいくつか出てきましたが、非常にわかりやすい説明でした。地域にゆかりのあるシルク産業に着目し、さらに廃棄されるものの活用にチャレンジし、新しい価値を創造しようという発想が素晴らしいと思いました。



自作アイススラリーで 熱中症対策

山形県立谷地高等学校

奥山 陽菜 / 渡邊 瑠愛

CONTENT 発表内容

私たちは今年の夏まで野球部のマネージャーとして活動していました。その中で熱中症対策について学び、部員たちをサポートしたいと考えました。熱中症を予防するためには、汗によって失われたナトリウムやカリウムを補給しなくてはなりません。また、深部体温（体の中心部の体温）の上昇を抑えることが必要です。

そこで注目されているのが、アイススラリーです。最近ではドラッグストアでも見かけるようになりました。アイススラリーとは、簡単に言うと、飲む氷です。近年、スポーツシーンで推奨されています。昨年から夏の高校野球全国大会でも県予選でもクーリングタイムでアイススラリーが導入されました。アイススラリーは、体重1kgあたり7.5gの摂取が目安です。70kgの選手であれば525g、市販のアイススラリー（100g）が5～6本は必要です。また、市販のアイススラリーは1個200円するので、かなりの費用がかかってしまいます。

そこで自分たちでアイススラリーを作ってみようと考えました。初めはスポーツ飲料と、そのスポーツ飲料で作った氷

アイススラリーを作る



をミキサーにかけました。そして市販のアイススラリーに加えられている成分から試行錯誤し、嚥下食用のとろみ剤を使ってみることにしました。高校生に自作アイススラリーと市販のアイススラリーを飲み比べてもらい、改良を重ねました。

次の目標は冷たすぎず、のどごしが良く、飲み込みやすいアイススラリーを作ることです。部員のために始めた取り組みですが、高齢者や子どもなどいろいろな人に向け、手軽に熱中症対策ができる手作りアイススラリーの普及を目指したいです。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

Q. (試飲して) 甘すぎなくて飲みやすいですね。このアイススラリーのメインターゲットは誰ですか？

A. 山形は高齢化率が全国トップ5に入ります。高齢者を中心に農作業をする方も多いと思うので、熱中症対策として、自作アイススラリーを作って自分で飲んでほしいという思いで考えました。



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

(試飲して) 非常においしくて、夏であれば飲んだ瞬間に体が冷やされる感覚になると思います。

アイススラリーという言葉自体を初めて聞いたので、この存在を知ることによって熱中症予防の意識を高めることになるとと思います。そういった意味でもぜひ広げていただきたいと思います。



搾りかすがビーガンレザーに変身!! 食品廃棄物を宝物に変えるSDGsのアイデア

山形県立置賜農業高等学校

金子 唯杏 / 五十嵐 由梨亜 / 土屋 さら

CONTENT 発表内容

置賜農業高校ではリンゴのジュースを製造しています。どんなジュースでも、作ると残渣と呼ばれる搾りかすがたくさん出ます。皆さんは果樹王国と言われる山形県で、リンゴやラ・フランスなどの残渣が大量に廃棄されていることをご存知ですか。残渣が腐敗すると、大量のメタンガスが発生し、燃やせばCO₂が排出されるんです。

そこで私たちはこのメタンガスやCO₂の発生を減らす方法はないかと知恵を出し合い、ひらめいたのが、残渣を利用した動物性の材料を使わない人工の皮、ビーガンレザーを制作することです。作り方はインターネットで検索したほか、山形大学工学部で講座も受講しました。その結果、残渣+ポリウレタン+でんぶん粉+寒天粉をミキサーで混合し乾燥させると完成することがわかりましたが、うまくいきませんでした。どんな割合が最適なのか50回以上チャレンジし、私たちのビーガンレザーが完成しました。高校生の成功は全国で初めてだそうです。

一方で、でんぶん粉や寒天粉のような食べ物を使うのもったいないと思いました。そこで稲刈りの後に出てくる再



生2番穂からとれる米粉を利用してレザーを完成させ、さらにコースターに加工しました。インバウンドを意識し、ダリヤやユリ、米沢牛など置賜の特産品をイメージしたコースターも制作できます。

私たちは、捨てればゴミの残渣をビーガンレザーという宝物に変身させました。残渣を1kg減らせば、142gのメタンガスの発生を抑え、3,550gのCO₂を減らしたことになります。

ビーガンレザーは残渣を減らすEcology、原価が安いEconomy、そして動物愛護のAnimal Welfareで全国に、そして全世界に発信できる優れたものです。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO 矢野 和男

素晴らしい発表でした。テンポがよく声がそろっていて、ストーリーもよくわかりました。特に途中で米粉を使うところなど工夫をしながらアイデアを前に進めていくプロセスが分かりやすく説明されていて良かったです。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

発表のテンポに引き込まれ、非常に上手なプレゼンでした。コースターがシンプルでおしゃれで欲しくなりました。先輩の研究を引き継いで、さらに発展させている点も素晴らしいと思います。またSDGsの視点を考えているだけでなく、販売計画まできちんとできていることに圧倒されました。今後が楽しみです。

香りで旅する山形県

～捨てないフルーツから生まれる未来～

東北文教大学 山形城北高等学校
高橋 慧／高橋 陽葵

CONTENT 発表内容

皆さんは山形県の魅力といえば何を思い浮かべますか。私たちはフルーツに注目しました。山形県は全国屈指のフルーツ王国とされており、品質の良いフルーツがたくさん生産されています。しかし最近、規格外フルーツの廃棄が問題となっています。国内で生産される農作物の約2割が規格外として廃棄されており、近年の気候変動や病気などの影響で、廃棄されるフルーツはどうしても出てしまうという声もありました。

そこで、私たちは廃棄フルーツと観光を掛け合わせた新しい商品「やまがた めんごい香」を提案します。「めんごい」は山形弁でかわいいという意味です。

「やまがた めんごい香」は、廃棄されるフルーツをドライフルーツに加工し、アロマオイルと組み合わせたルームフレグランスです。アロマスティックには、剪定で出た果樹の枝を再利用します。全国的にも知名度の高いラ・フランスの他、桃やリンゴなど全て山形県産のフルーツを使うのがこの商品の特徴です。自然由来の香りのため、強い匂いが苦手な方でも安心して利用できる商品を目指します。実際に私



たちはルームフレグランスを作り、教室に設置したところ、クラスメイトからも好評でした。

今後は、「やまがた めんごい香」を県内の宿泊施設の客室に設置していただき、主に観光客に向けて規格外フルーツの再利用方法をPRします。また、香りは記憶と直接関係しているというデータもあるため、山形での思い出をより強く印象に残す効果も期待できます。「やまがた めんごい香」を体験した方に、もう一度山形に行きたいと思ってもらえるような商品にします。フルーツは食べるだけではないということを知ってもらえるきっかけになればと思います。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

このような食品ロスの企画では「フルーツや野菜がもったいない」という指摘で終わりがちですが、フルーツ王国としてのブランドが失われるというところまで言及しているのが他とは違って、きちんと考えられているのがよく伝わってきました。



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

香りに着目したのが新たな発想だと思いました。私も昨年北欧に行ったとき、森のイメージがあったので森の香りのフレグランスを買ってきました。ですので、山形の香り=フルーツというブランディング・印象付けにマッチしてとても良い発想だと思います。



NIEでゲームプレイ

～新聞であそぼ～

山形県立山形東高等学校
堀 文慈 / 松田 剛瑠 / 藤多 葵

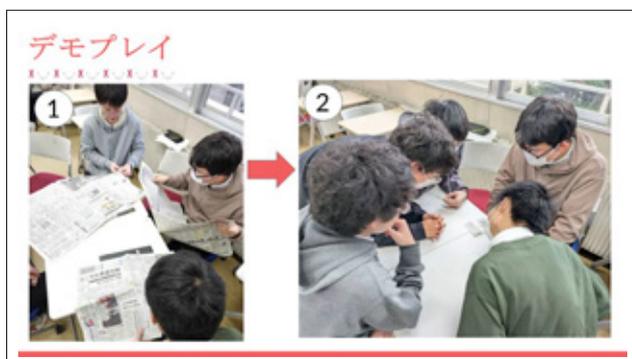
CONTENT 発表内容

山形県は、1世帯当たりの新聞発行部数が全国7位です。山形新聞社が2016年度から1学級1新聞という活動をスタートさせ、現在では県内の小学校から大学まで、1,670以上のクラスに毎朝新聞が届けられています。ですが、高校生の現状はどうでしょうか。山形東高校の日常風景を例にしますと、授業中に先生が今朝の新聞の話題を振ってもみんなボカンとしていますし、「昨日のテレビ番組見た?」というような感覚で、「今朝の新聞見た?」なんて言う人はほとんどいません。先述した1学級1新聞も積極的に利用されているとは言い難い状況です。

そこで私たちは新聞とボードゲームを掛け合わせたアイデアを提案します。

ゲームの手順は以下の通りです。

- ①新聞の中から自分が気になった記事を選び、切り出す
- ②記事を見出しの部分と、文章の部分に分けて切り出す
- ③切り出した記事の文章部分からランダムで1つ選び、全員が黙読
見出しの部分は見えないようにしておく



- ④読み終わった人から、記事に合う見出しを考える
この記事を選んだ人、つまり記事の正解をわかっている人も新しく考える
- ⑤全員が考え終わったら、各々発表
- ⑥最もこの記事に合うと思う案に1人1票投票
- ⑦実際の見出しを発表

このゲームで遊ぶことにより、新聞への親しみが湧くとともに、気になっていた記事を選び取る力、記事を読んでその内容の要点を捉える力、捉えた要点から得た情報を短い言葉で表現する力を養うことが期待できます。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO 矢野 和男

新聞×ゲームという異質なものを組み合わせているのが良かったのと、ゲームの中で見出しを考えるアイデアは秀逸だと思いました。物事にはいろいろな面があるので、どの面を捉えるかで意味合いが変わってくる。そういう力を鍛えるのは非常に意味があり、本質的なアイデアを提案されていると思いました。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

非常に取り組みやすいゲームで、どの学校でも実践できそうだと感心しました。文章を要約する力がつきますし、発表では自分の考えを提示しながら、相手の考えを聞く対話も必要です。それを自然と楽しみながらできるので、素晴らしいアイデアだと思いました。



自然の力でおからだが ウコギ(動き)出す

山形県立米沢鶴城高等学校
五十嵐 結菜 / 関 菜々美 / 大沼 萌依

CONTENT 発表内容

昨年12月、米沢市のスーパーが事業を停止したことで、市民には大きな影響がありました。これは生産者にとって同じであり、それまで販売していた店舗がなくなることは死活問題です。その一例として、豆腐を作るときに出る副産物のおからが大量に余っているという話を聞きました。

そこでおからを使った新スイーツのレシピを作成し、米沢市の菓子店に広めることで、おからを有効活用できるだけでなく、米沢の新銘菓として広めることができなかと考えました。また、米沢らしさを考えた際、独自性を出すためにウコギを活用してはどうかと考えました。ウコギは垣根などに使用される植物で、米沢では学校給食にウコギご飯が出るなど古くから地域食材として親しまれています。ウコギはパウダー状のものを色付けとして使用することにしました。

試行錯誤を重ね、おからを使用したフロランタンとウコギを使用したマドレーヌが完成しました。おからを使用したフロランタンは「おかランタン」と命名し、ウコギを使用したマドレーヌは「ウコギマドレーヌ」と命名しました。テスト販売



も兼ねて、地域のマルシェに出店し1個200円で販売したところ、売れ行きは好調で数時間で完売しました。

今後更なる発展を目指して、原材料にはおからとウコギいずれかが少量でも入っていれば、おかランタン、ウコギマドレーヌと定義して良いこととし、レシピを市内の菓子店に持ち込むこととしました。手に取りやすい価格設定とウコギを使用した独自性で米沢の魅力を広めていくことを目指します。

COMMENT 審査員コメント



東北芸術工科大学教授 片岡 英彦

(試食して)非常に美味しかったです。地域で止まってしまった食材を資源として価値を広げて、再び流通に戻す流れがとても素晴らしいと思います。今回のアイデアがほかの食材でも生かせれば、米沢以外でも使えるかもしれません。また米沢で何かの理由で止まってしまっているものを再び回していくことにも応用できると思います。



株式会社ジョイン専務取締役 武田 靖子

米沢銘菓という視点で見ると、ウコギは上杉鷹山の時代からの文化があってすぐわかりやすいですが、おからは米沢との繋がりがなかなかわかりにくいと思います。おからは食物繊維が豊富でヘルシーなイメージでPRポイントはたくさんあると思うので、販売の際には消費喚起できるような理由づけをより深めてもらえればと思います。



スマサポ

～世代を超えて繋がる、
安心・便利なデジタルライフの実現～

惺山高等学校

小笠原 結琉海 / 工藤 優花 / 森谷 優奈

CONTENT 発表内容

「壊してしまうかもしれない」「騙されてしまうかもしれない」これは私たちの身近にいる高齢者の方々がスマートフォン(スマホ)を使う際に口にしていた声です。

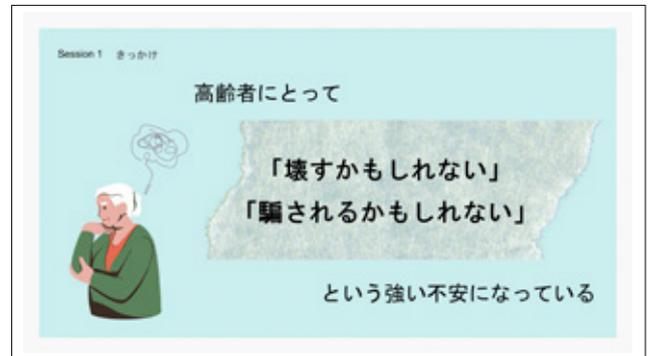
そこで、私たちのサービスが目指すのは、デジタル生活の質の向上と世代間交流の促進、安心と楽しさを届ける「デジタル・インクルージョン」の実現です。具体的には公民館などで、スマホ・タブレットの操作講習会を実施します。内容はスマホ・タブレットの基本操作から、迷惑メールを用いた詐欺への対策などを実施し、持続可能なサービスを目指します。福祉系の学部進学・就職を目指す学生にとって、地元の高齢者とのカジュアルな交流は大きなメリットになります。また、年間を通じた地域企画の運営経験は、将来の働き方を考える大きな機会となります。

この活動をさらに発展させたアイデアをご紹介します。

■「スマホなんでも相談所」の開設

(高齢者が日常の中で抱えるちょっとした疑問に高校生がオンラインで返信)

■スマホで撮る山形写真コンテスト



(高齢者と高校生が共同でスマホを使って山形の好きな景色を撮るコンテスト)

■スマホでデジタル年賀状・暑中見舞い作りワークショップ

■スマホで山形の宝探しミニゲーム(街歩き×デジタル)

これらの活動を通して、高校生ならではの明るい空気作りや若者らしいセンスが魅力としてあふれ出し、高齢者の方々に元気と新鮮な楽しさを提供できると確信しています。

COMMENT 審査員コメント



株式会社ハピネスプラネット代表取締役CEO 矢野 和男

Q. 活動の準備段階で、高齢者と会話はしましたか？

A. 身近なおじいちゃんとおばあちゃんにしか聞けませんでした。高校生と関わる機会が少ないので楽しそうという意見をいただきました。



山形県教育局教育DX推進監(兼)教育次長 米野 和徳

高齢者の孤立防止、デジタル弱者を高校生が救う取組みで素晴らしいと思います。

顔が見える交流として高校生がコミュニケーションを学び、高齢者もスマホについて学ぶ Win-Win の関係になっていると思います。そしてすぐにでも実施できるように周到な準備がなされていて、素晴らしいと思いました。